

【『琅』三十四号・あとがき】

本号掲載のエッセイ執筆のために読んでいた佐藤春夫の短編「オカアサン」の中で、ハツとさせられる記述に遭遇した。この短編、話の展開は推理小説仕立てだが、盗難事件も殺人事件も起こらず、内容的にはフアンタジーと言える。

どこか外国との接点があると思われる鸚鵡が主人公（？）の小説で、その鸚鵡が「パパ・ママ」ではなく「オカアサン」と発声することに共感して、語り手はこんな風に言っている。

「・・・近頃のわが国の少し程度の高い家庭で、父母のことを呼ばせて『パパ』『ママ』をもつてすることが幼いころに言いならされたあのなつかしい『お父さん』『お母さん』という言葉をすてて、何を好んで、どんな理由があつて、その子供たちに『パパ』『ママ』などと言わせなければならぬのでしよう・・・言葉捨てるといふことは心を捨てることなのです。・・・」

先日、テレビを見ていて、誰もがその名を知っているNHKの著名な女性アナウンサーが、インタビューのやり取りの中で思わず「ハヤツ！」と漏らす場面に遭遇した。相手に合わせてのことだったろうが、こちらの気持ちの中にはざらついたものが残った。当のアナウンサー自身、自分の口にした言葉の重み（軽さ？）に気づいたようにも感じられたが、特に言い改めることはなかった。

その後しばらくして、朝日新聞のTV番組の頁に

ある「試写室」に、ドキュメンタリー番組の紹介記事が載った。その番組での司会者の活躍ぶりを評して「語りの熱量が半端ない」とあった。「見れる・食べれる」だの「何気に・・・」が日常用語として通用している時代だから、目くじらを立てるほどのことではないのかもしれないが、このような言葉で評価されると、たとえその番組が優れたものであつても、見ようという気持ちに萎えさせてしまい兼ねないということも、端から年寄りのことなど相手にはしていないというなら話は別だが・・・。

現在、私たちが「標準・正当」と思つて使っている言葉の中にも、一世紀も遡れば怪しげな表現とされていたものもあるやに聞く。だからといって、そうした言葉を率先して使おうという気持ちにはなれない。どこかに、「言葉を捨てる」といふことは心を捨てること」の思いがあるからだろうと、「オカアサン」を読んで気づかされた次第である。

（茂治）

（次号原稿締め切り日） 二〇一八年九月末日

『琅』三十四号 二〇一八年五月 発行

編集・発行人 松村 茂治

発行所 252-1143 神奈川県相模原市緑区橋本5-26-19

「琅の会」 Ⅲ（〇四二一七七三一五九二七）

印刷所 株式会社ポプルス